

## 【女性の自伝】 II. 母性領域への回帰

水田宗子

### 1

マヤ・アンジェロウの『歌え、翔べない鳥たちよ』<sup>(1)</sup>は、多くの黒人女性に勇気と誇りを与えた作品だと言われている。黒人女性芸術家として成功したマヤ・アンジェロウの、高らかな自己主張と黒人文化および女性謳歌が、この自伝の基調をなしているからだ。

アンジェロウが少女時代を過ごしたアーカンソー州のゲットーは、黒人の魂の原風景として描かれるが、そこを守るのは母性の原型像としてのアンジェロウの祖母＝「ママ」である。アンジェロウにとって、黒人の魂を維持し、保護するものは母性であり、この母性領域の再生とそこへの回帰が自伝『歌え、翔べない鳥たちよ』における「私」＝アンジェロウの自己出産であり、成長なのである。

ここでは、アンジェロウの成長の過程、幼年期から少女期を経て子供を産むまでの、波乱にみちた生活と内面の過程が、〈教養小説〉とあってよい完成度をもって描かれていて、この作品のあとも自伝は書き継がれるが、<sup>(2)</sup> この作品はこれ自体で完結している。

『歌え、翔べない鳥たちよ』はまた、アンジェロウが育った、1960年代以前のアーカンソーの黒人ゲットーでの生活を鮮明に描いていて、それもこの作品の魅力の源泉となっている。黒人ゲットーは、つい最近まで確かに存在していたのに今は消滅してしまった黒人の心の故郷として、読む者の目前に立ち現われてくる。そこからのひとりの黒人少女の出発——離別と帰還——が、この作品の一つのモチーフである。

黒人ゲットーは、白人社会からシャットアウトされた黒人たちが閉じ込められている隔離空間である。それは翼を持つ鳥たちの自由な飛翔を阻む鳥籠である。作品の中心は、当然、アンジェロウ自身の内的成長と自己形成の記述である。しかし、それは鳥籠であるこの黒人ゲットーの生活に深く根ざしている。そこであるいは破滅し、あるいは生き残る、多くの黒人たちの生に基因している。自己の内面は、彼らの生を語ることなくしては、語ることはおろか、垣間見ることできない、それらの一部なのである。アンジェロウが描き出す彼女の自己形成の軌跡は、黒人の生の風景の一シーンであり、彼女の内面、その明晰な精神や大らかな人間性は、その背後の茫漠

として霧に包まれた黒人の魂の原野に溶け込み、そこから浮かび上がってくる。そのとき、籠の内側は、窒息しそうな囲いであると同時に、安全な繭、牧歌的なサンクチュアリとしての姿を垣間見せるのである。アーカンソーの黒人ゲッターは、強い象徴性を帯びた神話的空間となってゆく。

アンジェロウの成長は、分身的な存在である兄のベイリーの成長と表裏一体をなしている。ベイリーこそ、彼女に詩を教え、自由への希求を植えつけた英雄であり、同志なのである。ベイリーはシェークスピアやポオを愛読し、それをアンジェロウに教えた。ゲッターに住む黒人の日常には無縁な文学が、アンジェロウの内なる魂を揺さぶり、歌の心を触発する。〈内からの声〉は、若いアンジェロウに、それが真実への道であると同時に、自分を越えた大いなるものへの自分をつなげる力であると感じさせる。アンジェロウの成長の過程とは、やがてその歌への衝動が徐々に形をとり、その力が大きくなって、身も心もそれに聴き入りながら、その力に引きずられてゆく過程でもある。

しかし、ベイリーとアンジェロウとはまるで双子のように魂を分かち合いながらも、黒人の男と女の経験は、籠の中であるゲッターにおいても、外部の白人社会の中においても大きく異なる。二人は異なった通過儀礼を経て、異なった世界へと繭の中から旅立つのだが、ベイリーはその内なる歌への心をうまく育て、それを声として表現する道を見出すことができない。アンジェロウと深く分かち合った感受性は、表現に結晶されることなく、黒人男性の希望のない生存のうちにくすぶったまま潰えさせられてしまうのである。

このゲッターの生活の現実を背景に展開する、若い黒人の内的成長のドラマを貫いているのは、〈歌〉と〈脱出〉という、二つのモチーフである。〈歌〉と〈脱出〉の道は、また、性的目覚めへの道程であり、〈母探し〉の道程にも重なる。

この作品は、家族離散が常である南部のゲッターの黒人家族の物語であるが、子供たちの成長、恋愛、性の体験、結婚、出産といった、白人中産階級のホームドラマでならかならず見られる出来事は、ここにも当然存在するが、それは極端に異なった形においてである。

繭の中である黒人ゲッターとそこでの家族を守り、司るのは、「ママ」と呼ばれる祖母である。母親は離婚したあと、ベイリーとアンジェロウを祖母に預けて都会へ出て働いている。不在の母は、兄妹に大きな影響力を及ぼしている。二人はいずれは成長して、繭を出て、母のもとへ行くだろう。祖母は二人を母へ渡すだろう。ベイリーは外の母に強い憧れを抱いているが、アンジェロウはかならずしもそうではない。ゲッターに比べて都会には自由があるが、そこは騒音と不安に満ちている。安全な繭の内側には黒人しかいないが、危険なその外では常に白人からの差別に身をさらさねばならない。分離 (Segregation) と統合 (Integration) のどちらを選ぶかは、黒人にとって20世紀後半の最大の課題であった。どちらも「ママ」と呼び、「母」と呼ぶ、祖母と母親とは、黒人の少女であるアンジェロウにとっては、ゲッターの内と外がそうであるように、異な

った希求と生き方を象徴する女性存在であり、アンジェロウには祖母といるほうが心が休まる気がした。

美しく、流動的で自由だが、白人に搾取され、辛い経験に耐えなければならない母に比して、生まれた土地に定着し、商いし、家族を養い、コミュニティの世話をする祖母には、自らの領域を守り、司る者の自信があり、黒人としての尊厳がある。ゲッターの限られた空間の中で、たゆむたい、澱んで流れない時間、それは停滞であるが、同時に永遠の時でもある。だが、都会で働く母親は、容赦なく進展する近代の時間の中で、尊厳も、アイデンティティも見失う危険にさらされている。

「祖母」＝ママは、アンジェロウが今までに見たどの女性よりも背が高く、堂々としている。幼いアンジェロウの顔をすっきり包んでしまえるほど大きな掌を持ち、日曜日に教会で賛美歌を歌うとき、心の底からほとぼしるその声は、会堂の空気を振動させ、教会に集まった人びとの心を鼓動させた。昔、「ママ」は美しかったそうだが、今は力強さと威厳に満ちていると、アンジェロウは思う。「ママ」は、人びとの世話をし、保護し、癒す、母性の原型であり、信心深く、義務感と責任感が強く、その勤勉さ、忍耐強さと、外敵にたいする毅然とした態度で、黒人の子供たちと黒人のコミュニティを守り、そのアイデンティティを支える存在である。

一方、「母」は母性の他の一面を提示する。彼女は籠から抜け出して自由に放浪し、放埒な性に身をまかせている。ベイリーはそういう性的に魅力的な母に憧れ、彼女もまた、息子を繭の中からおびき出し、次第に墜落と破滅へと導く誘惑者の役割を果す。彼女は所有欲は強いが、介抱し、保護する母性は持ち合わさず、子供たちが傷ついて介抱が必要となると、祖母のところへ送り返すのである。母のセクシュアリティは男たちを刺激して暴力を誘発する。アンジェロウは幼女のとき、母と同棲していた男に犯された。その性体験は、満たされぬ黒人の男たちの性的暴力に痛めつけられ、彼らの犠牲となる黒人女性と子供という、黒人社会の不幸な構図だったが、母の性は、娘の悪夢の源泉となったのである。

美しく、自由だが、倫理的な強さも、抱擁する母性もなく、黒人としてのプライドもない母を、アンジェロウは見下している。そういう母親は、アンジェロウにとっての理想の自己像のモデルにはなり得ない。彼女が自己形成のモデルとして希求するのは、明らかに祖母＝「ママ」のふところ、その母性領域である。

やがて予想通り、兄妹は祖母の繭から出て、都会の母のもとへ移ってくる。それは試練の旅の始まりではあっても、まだ〈脱出〉とはいえない。この旅立ちを、繭からの確かな〈脱出〉にするのは、アンジェロウの性体験であり、その結果の彼女自身の選択である。

繭の外の都会の街路で、アンジェロウは、あたかもいらぬものを捨てるように、行きずりの男と初めての性交渉を持ち、その結果として、十代の若さで子供を出産することになる。母親の連れ合いから幼女期に強姦されるという悪夢から、男を愛することなく、父親のない子を自分ひ

とりで産み、育てるという選択が、アンジェロウの成長を形づくる性の体験なのである。それは、宿命を自らの選択に変える、黒人女性アンジェロウの意志の表現である。この未婚の母の誕生こそ、アンジェロウの少女から女への成長であり、彼女が望む自己像の出産でもあった。

父のない子供を産んだアンジェロウが、自分と子供だけで家族をつくっていかうとするとき、祖母と母がそれぞれに体現した母性の二面性のうち、彼女が選択したのは、祖母の母性領域の継承であった。魂の原風景である祖母のいる場所もまた、〈籠〉と〈繭〉という二面性を持っている。白人によるアメリカ社会から排除され、隔離され、閉じ込められた籠の中の、貧困と無知と欲求不満の渦巻く暴力的な空間と、自分たちを差別する白人から離れて、黒人だけで自足する、停滞でもあれば至福でもある、繭の中に保護された空間。〈籠〉から脱出したアンジェロウは、未婚の母として、祖母に体現される〈繭〉にも似た母性領域に帰還しようとする。この選択によって、彼女は黒人の女性に成長してゆくのであり、そのときはじめて彼女は母と和解できたと感じるのである。

アンジェロウの世界、その母と子の家族には、〈父親〉は存在しない。存在しないというよりも、そこでは〈父親〉像は、内面を押し潰されたみじめな犠牲者であり、離散の象徴なのである。アンジェロウの成長の通過儀礼は、〈父親〉によって犯され、傷つけられることだった。彼女の成長の証は、父親のない子供の母になること、夫のいない家族を持つことだった。

魂の原風景としての祖母の母性領域の再構築とそこへの回帰こそアンジェロウの自伝的「私」が求める、〈私〉という個を超える〈全体〉である。それなしには、「私」の個性性もあり得ない。その〈全体〉の普遍性に照らしてはじめて、アンジェロウの「私」の、黒人女性としてのアイデンティティと個性性が、視えるものとして浮かび出てくるのである。マヤ・アンジェロウが、未婚の母になることによって再生させ、回帰したいと希求する〈全体〉＝前近代的な母性領域は、アンジェロウの追憶の中にあり、彼女が自らのサイキの中から掘みだしてきたものだ。それは観念の操作の産物である。

『歌え、翔べない鳥たちよ』は、幼年期からの少女期にかけての〈繭の中〉での経験の生き生きとした描写に満ちていて、イデオロギーとしての母性思想を声高に提唱するものではない。しかし、自伝という〈私〉を再構築する作業は、それ自体、観念の作業でもあるのだから、その観念の浄化を受けた〈私〉を映し、〈私〉たらしめるものとしての〈全体〉が、さらに意図的な観念の操作の産物であるのは当然である。女性の自伝の多くが、とりわけ最近のフェミニストによる自伝の多くが、母性領域の確認であることは、したがって偶然ではない。

この作品を通じてアンジェロウが表現しようとした自伝的意図は、肯定的な自己像を気負って描き出すというよりは、自分がそこに合体したいと願望する夢の体現としての、理想の母性領域を自らのサイキの深層から紡ぎだして構築することだった。自伝は、望ましい自己像の直接の提示であるよりは、自分が同一化できる理想的価値の領域に自己を映すことによって、自らのアイ

デンティティと独自性が見えてくる原型的な体系を構築しようとする試みである。幼児期にまで及ぶ自分の過去に遡り、意識の深層に降り、そこに蓄積された共同的な文化の根源を訪ねて、納得できる〈原形〉を探りあてようとした、マヤ・アンジェロウの自伝の試みは、普遍的な思想への試みであり、フェミニズムの母性領域探求と、その母性賛歌の最良の一端を形づくるものとして、20世紀後半の母性思想の中に位置づけられるべきものであろう。

アンジェロウにおける祖母＝「ママ」は、生き生きと描かれた等身大の黒人女性像であると同時に、意識の深層に探りあてられた女性文化の原型——グレート・マザー——として普遍性を持つ。そして、このグレート・マザーである祖母に体现された母性領域が、黒人文化の固有性に裏打ちされたものであることによって、アンジェロウの母性領域への回帰という思想的な提唱は観念的なものとならず、多くの黒人女性読者の強い共感を得たのである。

## 2

中国系アメリカ人作家であるマクシーン・ホン・キングストンが、『チャイナタウンの女武者』<sup>3)</sup>で織り出すのは、中国文化の伝統を背景とした母性領域である。キングストンのこの〈自伝〉は、アイデンティティの危機に見舞われているアメリカ生れの中国人女性の文化的体験と、存在の意識の深層に分け入ってゆく自己探求の旅という明確なテーマを持っている。

キングストンの生れ育ったサンフランシスコのチャイナタウンは、マヤ・アンジェロウにおけるアーカンソーの黒人ゲットーと同じく、サンクチュアリであると同時に牢獄である。この作品は、「名のない女」という第1章から始まることでもはっきりしているように、白人社会から隔離された中国人保護領域で育ち、成長した女性が、外の世界へ出て行こうとする過程で、自分の名を失ってしまっていることを自覚する、自己認識の物語である。この〈名のない女〉は、現在の主人公であると同時に、前近代の中国の村の女、さらにはそこに生れ、やがてアメリカへ渡って来た母親でもあるという、多層構造をもって語られる。

中国系2世としてアメリカで生れ、教育を受けた「私」が、その母の、さらには前近代の中国の村の女たちの経験を、自分の経験と重ね合わせて認識していく。前近代も近代も現代も、中国もアメリカも、教育を受けていても受けていなくても、女性経験という点では変わりなく共通する〈本質的〉なもの、それは〈名のないこと〉という、女性の内面の混乱である。

第1章の中では、未婚のまま身ごもり、村中から迫害を受けながら最後まで男の名を明かすことなく女兒を出産し、そのまま赤ん坊と一緒に井戸へ身を投げて自殺してしまう、主人公＝「私」の叔母にあたる女性の話が語られる。生れてきた子が男児なら、また違った結果になっていただろうと、この話を「私」に語った母親は娘に言う。前近代の村社会が、叔母の〈個〉も〈女性〉の生をも抹殺したのだ。いずれは殺される女兒を抱いて井戸の中に身を投げて死んだ叔母の

名を「私」は知らない。父親は、汚名を受けて死んだ、墓もないこの妹の存在を記憶からも抹消しようとし、母親もその名を呼んだことがない。

こうした話は、母の声、母の〈語り〉を通して「私」に告げられるのだが、父権制の徹底した革命前の中国の村落に生まれた母親は、人に隠れて勉強し、三十代になってから医師の免許を取ったのだった。アメリカへ出稼ぎに行った夫を待っている間、彼女は村で助産婦から看護婦、外科の治療まで手がけて村人の世話をする。しかし1939年、日本との戦争や内戦の激しくなる中国を逃れて、洗濯屋を営む夫のいるアメリカに渡った彼女は、英語ができなかったのでアメリカでは医者として仕事することができず、トマト農場などの労働者として働き、故郷の家族や父親の2人の妻もふくめた親戚への送金と、子供たちの養育に心身をすりへらした。

母親の語りには、金を要求しつづける親戚への恨み、故郷の土地を奪った共産主義者への憎しみ、中国人を蔑視するアメリカ人への敵意、労働者としてしか生きられないアメリカ社会への嫌悪が、ないまぜになっている。彼女は娘に、女は女房になるか奴隷になるかしかないと言い、親の言うことを聞いて良い中国の女になろうとしないなら、親に売り飛ばされても当然だと言いながら、娘がアメリカ社会の中で成功することを願い、自分の果たせなかった夢を娘に託している。

井戸に身を投げた女を村人と同じように非難し、娘にもそれに同調を強いながら、それでいて母親は、家族を助けるために男装し、父親の身代りになって戦い、生きて英雄として村に帰ってきた民話の女武者、花木蘭のことも話して聞かせた。「私」は大きくなったら女武者になろうと思う。母親に聞かされた勇敢な花木蘭の話や歌は、少林寺拳法の師範の家に生れて鶴拳という拳法を編み出した、強い女武者の話などとともに、「私」の見る夢の中の戦う女たちの物語を紡ぎ出すようになる。

母親の語りは、期待と願望と失意と、誇りと不安と、その他もろもろの矛盾した情念に混沌としている。時には声を潜めて囁かれ、時には声を荒らげて激情的に語られる、けっして止むことのない母親の話を聞きながら育った「私」は、成長の過程で失語症に陥ってしまう。「私」はそれを、母親に舌を切り取られたからと妄想している。止むことなく話しつづけながら、母は娘の舌をそのつど鋏で切ったのだ、と。

しかし、母親の話が中国人移民の女たちの典型的なおしゃべりであるのと同じくらいに、〈失語症〉は2世の経験なのである。チャイナタウンの囲いの中で、故国の経験を引きずったままの中国語の世界に育った2世たちは、外部との接触の際、まず言葉の障害に突き当たる。安全な囲いの内部で育った彼らが、初めて外部と接触するのは、アメリカ人と共学の学校であり、そこで内と外とを媒介するものは英語である。外の世界では、しゃべれないこと、しゃべらないことは存在しないことだ。母親とアメリカ社会によって二重に舌を切られている「私」は、そこでは〈名のない女〉になってしまうのである。

チャイナタウンの外に出て、言葉を媒介として新しい現実との関わり方を見つけ出すこと、それはアメリカ生れの中国人2世にとって、自らのあり方、アイデンティティを見つけることにはほかならない。「私」の舌を取り戻す探求の旅は、自らが語る物語を見つけることによる、言葉の獲得から始まる。

そのためには、「私」はまず母親の話の呪縛から身を解き放たなければならない。無知ゆえに身を滅ぼした古い中国の女を軽蔑しながら、中国人の女として男に柔順な女房になれと教え、アメリカ社会の中で誰にも負けずに生きてきた自分よりもっと強い女になれと望む、錯綜し、矛盾し、混沌とした、母親の願望や要求から自分を解放しなければならない。そうでなければ「私」（私たち）の人生は失敗したことになるのだ。ヒロインになれる「私」を求めて、主人公は空想の武者修業へと旅立つ。

「私」の探求の旅は、母親のアグレッシヴな絶え間ない語りから逃れ、母親のサイキの手の届かない場所への旅であったが、探求が自らの内部に分け入るほかないものであるかぎり、それは母親のサイキに深くからめとられた、いわば母親の悪夢の影としての自らのサイキの奥底に降り立つことだった。中国人である母親の語りに振り回され、舌を切られたアメリカ生れの中国人2世の娘の、失語症からの回復は、母親のサイキに依拠して語られた物語を通して、自己探求と成長の過程を経てはじめて、可能になるのだ。

「私」が果敢に敵と戦い、打ち倒すためには、拳法や兵法を教えてくれる導師が必要だが、「私」が探求の夢の中で出会う老師夫妻は、明らかに父母に代わる親の像として登場する。とりわけ容赦なく厳しい老婦人は、慈愛に満ちた抱擁力の豊かな、真直ぐで混乱のない明晰な進路を「私」に指し示してくれる、理想の母親存在なのである。

また、主人公は、このサイキの深い底までの旅を通して、中国女性の原型をも引き出してくる。母親の妹は、アメリカへ渡ったまま自分を呼び寄せようとせず、別の女と家庭を持った夫が毎月送ってくる金で30年間暮してきたあと、姉を頼ってアメリカへやって来る。姉はそんな妹に、お前が最初の妻なのだから、男の家に乗り込んで、この家も彼らの子供も自分のものだ、女が出て行きたくなければ召使いにしてやるという権利がある、とけしかけるが、妹は香港のアパートを売り払ってアメリカへ来たことを後悔したり、泣き言を並べるばかりだ。姉は強引なほどのやり方で、ロサンゼルスで男が経営している病院まで妹を連れ出して、男に会わせたりする。妹は、夫に捨てられながら、その男の女房である以外の自分が見出せないまま、結局、精神病院で死ぬ。

夫が他の妻を持たないようにいつも目を光らせ、子供たちには母親と一致団結することを教え込み、子供たちの将来のためにと数学や化学を勉強させ、大学へやる姉と、弱く、無知な妹と。攻撃的で強く賢い主人公の母親と、やさしいが愚かな叔母。2人は共に、父権社会の中でサイキを傷つけられた、中国女性の原型なのである。

白虎山の奥深くでの2人の老導師に導かれた空想の武者修業と、彼らとの別れと出発、数々の

戦いを経て、女性原型への旅を経て、「私」は〈言葉〉を武器とした女武者としての自己出産を成し遂げる。そのプロセスを、主人公は〈言葉による復讐〉と呼んでいる。自伝とは〈言葉による復讐〉なのである。

だが、母親のサイキの犠牲者としての「私」の成長は、母親からの離脱によって成し遂げられたとはいえ、アメリカ社会に生きる中国人としての娘が中国人である母を継承する存在であり、矛盾のうちに母親の分身であることもまた真実である。自伝の最後に語られる、芝居好きだった祖母が母親を連れて観た（のかもしれない）芝居の話は、母親が話し始め、〈語る人〉＝作家となった「私」が語り終える、母娘と、そしてアメリカの中国人女性との、象徴的な合作の物語なのである。

匈奴に捕えられて、草原や砂漠を馬とともに風のように移動する彼らの野営地で12年も暮し、2人の子供を産んだ女が、月光に照らされた砂の上に腰をおろし、高く肘を上げて笛を吹く、何百人という匈奴の鋭い笛の音に、思わず望郷の歌を歌う。高く透き通った歌声は中国語のようだったが、匈奴は女の歌の悲しみと憤りとを理解した。母親の中国語を理解しようとせず、真似をしては笑うだけであった子供たちが、母親の歌を聴いて笑わず、母の傍に来て腰をおろし、声を合わせて歌い始める。やがて解放された女は匈奴の歌を漢族に伝え、それは中国の楽器によく合ったという。

こうして、キングストンの自伝は、母親からの脱出とそこへの帰還であり、その道のりが、「私」の少女から大人への成長の過程、母親の語りと重ね合わせて自らの物語を語る人間＝作家として、自己出産へ向けての成長の過程なのであった。

武者修業の夢の中に現われる規範としての両親の姿や、母親と叔母の姿で示される女性の2つの原型を通して、キングストンによるこれらの中国女性のサイキをユング的に分析することも興味深いことだが、それ以上に、この自伝作品の特徴は、母親像の鮮明さである。父親は不在に近く、言葉を持たず、語らない。弟もまた、父親同様、稀薄な存在でしかない。

母親につかまり、呑み込まれ、食べられそうになった娘のサバイバルのための戦いは、自伝を書くことであった。母性領域との対決と凝視と、それを書くことによる自己出産への試みは、女性の自伝というジャンルを生み、支えてきた構造の核心であり、アンジェロウとキングストンの作品は、そのことをもっともよく表現しているのである。

キングストンの自伝における母親は、アンジェロウの祖母＝「ママ」のような、介護し、抱擁するグレートマザー像であるよりは、「私」の自我の形成を阻止し、呑み込んでしまうテリブルマザー像である。それは、弱者である女性の怨念とトラウマと、居直った生存者の強い自己主張によって形成された母性領域である。母親のサイキの呪縛からの「私」の逃走と、それにもかかわらず「私」に受け継がれる、母が現実でありサイキの深層であるという、母と娘の屈折した関係。しかし、娘たちはその相剋と葛藤を通じて、女性の自我を形成してゆくのである。



キングストンにおける理想的な母性領域は、アンジェロウの場合のように、現実の祖母＝「ママ」という人間存在に凝縮的に象徴化されることはなく、夢の中に幻想として存在するだけだが、そのいずれにおいても、自らの根拠を求めてのサイキの深層への旅が、そこに始まり、そこに触れるものであること、それが自分たちの文化的な過去への遡及であることは同じである。キングストンの文化的過去は、現実には掴むことのできない幻影であるが、それゆえに母親のサイキを形成し、「私」の内面を捉え、支配する強い力なのである。人種と性という、二重の纏足を強いられたアメリカ生れのマイノリティの女性にとって、個人のサイキと文化の深層に降り立つことを通しての母性領域の再確認と再構築は、この二重の纏足であった性と人種を肯定することによって自らを解放する道筋であった。

マイノリティでなくても、母のみに語りかけられ、母のみに語りかけて少女期を過ごす女性にとっては、母親は〈繭〉であると同時に〈籠〉なのであり、母と娘のこの屈折した関係の二面性の正視を回避して、女性の肉体的成長はあり得ないはずである。アンジェロウの自伝も、キングストンの自伝も、この母親との葛藤を、幼女期から少女期を経て大人になるまでの期間において語っている。少女期という、おそらく誰にとっても最も輝かしい光りと懐かしい追憶の霧に包まれた時間に、母親との相対を軸とした自己形成への原点が置かれている。

女性にとっての少女期は、ポーヴォワールが『第二の性』<sup>4)</sup> などを通して詳しく描き、分析するまで、その重要性がほとんど無視された空白の期間であった。父権制の下で、少女たちは、父親の価値を代行する母親によって躰を受け、やがて夫へと手渡された。祖母や叔母たちによる女性領域は少女の保護領域であると同時に、少女の母の〈個〉を抑圧し、自我を剝奪する共同体としても機能した。女性領域は父権制の代行機関であり、女性の怨念と屈折したコンプレックスの貯蔵庫でもあった。少女たちは、甘えと恐れのうちその領域に身をゆだねて育つ。

この女性領域から離れて外部の世界へと出て行った母親と、成長する「私」という両者の複雑な関係を描く、マヤ・アンジェロウとマキシーン・ホンキングストンの2つの自伝は、そのままこの近代の少女たちの物語であると言ってよい。そして、少女から大人の世界への通過儀礼は〈性〉であったから、彼女たちを育てたその女性領域からの脱出の契機もまた、性を伴った男性であるはずであるのに、アンジェロウやキングストンの少女の前に、彼女たちを女性領域から引き離して、あるいはそこから救出して、男性と共生する世界へと導くプリンスチャミングは現われることはない。性を不在のまま彼女たちが成人となるのは、社会というイメージを超えた、精神的・思想的領域においてである。それは具体的な社会の中での女性の生き方を示すものであるというよりは、自らのアイデンティティの根拠となる、内面的な思想としての母性領域を示すものなのである。

## 3

高群逸枝の『火の国の女の日記』<sup>(5)</sup> は、アンジェロウとキングストンにとってそれがほとんど処女作と言ってよい、それを書く過程そのものが作家としての自己出産の営みであったのと対照的に、すでに大部なライフワークを書き上げてきた69歳の女性の、最後の作品である。それは、終生書きついできた日記に即しながら、自らの人生のしめくりとして書かれた、〈自己という作品〉の決定版である。

高群逸枝の『母系制の研究』<sup>(6)</sup> 『招婿婚の研究』<sup>(7)</sup> 『女性の歴史』<sup>(8)</sup>などを貫いているのは、原始には〈母性我〉による母系の共同体が存在し、それが男性の〈個人我〉による父系社会に移行したことによって、作為的に母系制の史実が改変されて今日に到っているという主張である。この高群の歴史観と、その独特な造語である愛と平和社会の概念としての〈母性我〉は、高群自身にとってはすでに完成された思想であった。

『火の国の女の日記』は、その思想を生んだ自らの内的な世界と、その思想を生きた自分自身の生を描こうとしたもので、思想自体はテーマではない。むしろ、作者自身を思想的作品として総仕上げする試みであった。

事実、高群逸枝は、膨大なエネルギーによる努力と年月をかけてなされたその研究への評価そのものよりも、一種巫女的な高群逸枝という女人像の魅力によって、人びとを惹きつけてきた存在である。その生き方は崇拜者とも言える多くの読者、研究者を生み、その生涯はそれらの人びとによって詳しく調べられているにもかかわらず、なお深い神秘性に包まれ、伝説化されている。

『火の国の女の日記』は、夫であり、仕事上でも生涯の協力者であった橋本憲三との、合作とも言うべき自伝である。高群は、前年9月に起筆した自伝を未完成のまま、完成を憲三に託して1964年6月に死を迎える。ずっと書かれてきた高群の日記が自伝のもとになっているが、その日記自体が、憲三との共用日記であった。自伝は、高群の没後1年に刊行された。自伝の試みは高群が理想として掲げた夫との合体の実現であり、夫との合作の自伝を生み出したとき、この合体は完成するのである。

高群は、最初に会った瞬間から愛しはじめ、終生愛し合うことを誓った憲三との生活を、単なる2人の個人の、男と女の、経済的理由による結合でもなければ、家族をつくるための結合でもない、精神的結合を基礎とする心身の完全な合体へと高めていくものと定義する。それは高群が自伝の中で夫に向かい、読者に向かって、繰り返し語る理想である。アナーキーで放埒な生活に明け暮れ、妻をかえりみない夫との貧乏暮らしに希望を失って家出をした時も、夫が必死で自分を捜していることを知ると、飛んで帰ってくる。そこには夫との結合が宿命的なものであるという信念と主張がある。憲三の日記にも、逸枝に最初に会ったとき、生涯にわたって結びつけられる

だろう宿命を感じたと記されており、彼女との出会いは運命の恩恵である、これを一生汚さない  
と誓うと記されている。最初の出会いに直感した、宿命的結合の成就こそ、高群逸枝の生涯の目  
的であった。

この目的に向かって、夫と妻が意識的に歩みはじめるのは、高群逸枝が37歳のとき、憲三のす  
すめによって、女性史の体系化というライフワークにとりかかるときである。2人は〈森の家〉  
に立てこもり、憲三は以後、逸枝の後援者となり、〈僕〉となって、その才能を結晶させる女性  
史の完成に協力することを誓う。

面会謝絶の貼り紙をした〈森の家〉への隠棲は、過去に実在したにちがいない、母性を中心的  
価値とした母系制社会の研究へと、高群が想像力を飛翔させ、遡らせるためであると同時に、世  
間との交渉を絶って、純粋に凝縮した愛と合体の空間をつくりだそうとする仕掛けであった。

この〈森の研究所〉の聖なる時間と空間の中で、女性史学に結実してゆく高群逸枝の母性主義  
は、嬰兒の死産を契機として生れた。それは子を産み、触れ、抱いて育てる中で育まれる母性愛、  
成長する子の自我との葛藤という現実の回路を経て獲得された認識ではなく、愛する者を失った  
欠落感と、子を産めない空虚を埋める観念として形成され、純化された思想である。無垢のまま  
永遠に手の届かないところへ行ってしまった死児の魂を悼み、守護しようとする母性は、美しく、  
けなげで、強いものとして純化されたものである。子供という現実はこの空間には侵入しない。

本居宣長の古事記研究に触発されつつ、高群逸枝が想像力と観念を飛翔させるのは、中国の儒  
教的父系文化にたいする日本の母系文化的伝統としての母性領域である。マヤ・アンジェロウや  
マキシーン・ホン・キングストーンが、母親や祖母という現実中存在し、自分と密接な関わりを持  
つ血縁の女たちを対象としているのにたいして（アンジェロウの祖母像は、彼女の幼女期の記憶  
に封印された神話的存在だが）、高群は、非在の死児によって母性という象徴領域を引き出し、  
この両者の亀裂の深さと、したがって跳躍すべき距離の大きさを、「『女性史』という、どこにも  
まだなかった学問」領域を開拓することによって埋めようとする。

上代の古系譜と婚姻例からの忍耐強い実証という、未踏の方法による研究に注がれた苦労と努  
力の大きさと、それに費やされた年月の長さが、高群逸枝における母性領域の象徴性を強めてゆ  
く。高群の〈母性我〉は、歴史研究の実証的作業の果てに見えてきた象徴領域ではない。母性は  
高群の内部にすでに観念として存在しており、高群はそれを生きなければならない。歴史研究は、  
その観念を生きることなのだ。

時を超えた母性領域の実在を、この国における母系制と婚姻史において実証するという、〈森  
の家〉における研究は、2人の生を、単なる世間並みの夫婦以上の〈合体〉であらしめ、現実の  
生活を象徴化するための営為でもあった。それは彼らが自分たちの恋愛を宿命的としたのと同じ  
ように、自分たちに与えられた使命、運命とされたのであった。逸枝自身が執筆した自伝の最後  
にあたる、第3部の終りに書かれた、〈われらが研究所／われらが純愛の家〉という言葉が、そ

のことを象徴的に示している。

〈不在〉とされてきた母系制領域を求めての過去への遡及、〈非在〉となった愛児の不死の魂との交感、愛する男との精神と肉体の合体。時と空間を超えて非在なものを感じし、不可視なものを透視する、高群逸枝のロマンティズムを実現し、かつ完成させるものが、この自伝にほかならない。それは自らを母性領域として象徴化し、現実の生を観念として生きた高群の姿をもっともよく表現していて、それがすでに半ば神祕化され、伝説化されていた高群逸枝像を完成させる、仕上げの仕事となった。

童女のように純粹で、炎のような情熱と母性の慈悲を内にたたえ、現実を透視し、人の心も時間も空間も超えて宇宙の魂と交感する能力を持つ、そういう女性の原型的存在としての自己像の提出。それは憲三との文字通りの合作だからこそ成功した試みである。情報としての自伝は、このとき完璧なものとなる。その女性史、婚姻史の労作にもまして、自伝こそ高群逸枝の70年にわたるライフワークであった、と言うべきであろう。自伝なくして高群の女性史学はその実証性のみを問われる研究の一里程にすぎず、高群夫妻は仲の良いカップルにすぎない。

それにしても、母性という理念と母性主義を語りながら、母親像がさいごまで見えてこず、むしろ欠落しているのが、高群の自伝の特徴である。アンジェロウもキングストンも、自らのサイキに刻みつけられたトラウマとの闘いのうちに女性としての自我形成を行い、その過程で自己を超えるものとしての母性領域の認識に到っている。高群の自伝には、理想を体現する母親像も、対立と葛藤の対象となる母親像も不在で、サイキの傷あともない。高群の少女時代は、幸福で安全な、夢見る繭の中の世界として描かれ、結婚後の生活でも高群は童女のままである。高群逸枝の自我形成の契機や過程は、いったいどのようなものであったのだろうか。

高群逸枝の人生のあり方を決定的にするのは、憲三との出会いであるが、この出会いと結合には性的な要素が稀薄で、ここでも逸枝は童女的に〈プラトニック〉なのである。女性を両親の家から引き出し、少女時代を終らせるものは、男性との性的結合だが、自伝には〈教養小説〉の重要なテーマである、恋愛による、あるいは性的体験による成長の要素がほとんど見当たらない。高群の恋愛も性的体験も、精神的であり、観念的でさえある。妊娠でさえ、身体的であるよりは精神的出来事なのである。高群は胎児ではなく、母性愛という観念を孕んだと言ったほうがよいかもしれない。それは出産されなかった。対象はなかったのだ。逸枝は嬰兒を死産することによって、母性愛という観念を孕んだ自己を出産したのである。

憲三は逸枝の母性愛の対象ではなく、彼らの関係は、少女のまま城の中に眠らされるおとぎ話のいばら姫の話を想起させる。逸枝と憲三の〈森の家〉の〈森〉とは、逸枝をそこに封印する〈いばら〉であり、外界との交渉を遮断して童女のままだに眠らせ、夢見させるための保護林であったと言えよう。プリンスチャーミングは、いばらに囲まれた城の中に眠る少女を救い出し、大人にするのではなく、より深い森の眠りと夢に囲い込んだのである。

マヤ・アンジェロウ、マキシーン・ホン・キングストン、そして高群逸枝の自伝に共通する特徴、すなわち母性領域への回帰が、いずれも性愛という通過儀礼を経ないということは、何を意味しているのだろうか。

性愛の経験は、それが幸福なものであろうと不幸なものであろうと、少女を両親の保護、あるいは支配の下から、広い外の世界へ連れ出し、自立へと認識の目を開かせる契機だが、母親と同棲する男に犯されたアンジェロウの性はトラウマを残し、そのために性は性愛を育てることなく、アンジェロウを一足飛びに母親にさせる。彼女の母性領域の認識とそこへの回帰は、性愛の欠落を埋めるかのように思える。キングストンも、理想的な男性との結合について、あいまいな夢は持っていたとしても、結婚とは幼いときから母親にそう言われてきたように、男に養われる〈女房〉になることとして、それを忌避している。母親の悪夢から逃れた娘が母親と折り合いをつける道は、現実の母親という生身の女性を離れた、自分をも超えるものとしての母性を承認することだ。そこに到る道筋に、男性も性愛も関与することはないのである。

高群逸枝の場合、憲三との運命的な出会いと永遠の愛を夢想した逸枝が、その男との結婚生活の初期に経験したのは、まさに男の〈女房〉である自分ということで、それは〈奴隷〉の忍耐を強いられることであった。彼女はそれに耐えられずに家出する。愛する男性によって示される父権制的性差別ほど女性を深く傷つけるものではなく、近代の女性はほとんど例外なく、それによって恋愛幻想を砕かれているのだが、彼女の恋愛幻想＝愛の観念は、その現実を契機として修正されるのではなく、現実のほうが回避され、現実の経験によっては影響されない、天性の童女的な自己像の純化がはかられる。家出事件のあと、高群の自己観念への信念はかえってますます強められたのである。そこには、性愛を糧としての成長を拒む、頑なな意志があるかのようにさえ思える。

アンジェロウとキングストンの自伝には、彼女たちを男と女の現実に直面させる男性も、日常の性愛もない。彼女たちはそれを拒んでいる。高群逸枝もまた、夫を性愛の対象せず、夫の自我との対立と葛藤を避けた。あるいはそれを描くことを避けた。母性の理想像を内包していたはずの不可視の古代に飛翔する自己を、理想的母性の体現者とすること、それが高群の企てたことである。

自伝には、自らが語り、提出しようとする、理想的な自己像の目撃者、証人が必要である。高群は憲三にその役割を与えたのだが、彼は逸枝が合体を希求する当の相手であり、その自我を自分の自我に溶解させてしまおうとする対象である。逸枝にとって憲三は、他者であることをやめさせようとする、したがって他者たり得ない存在なのである。他者ではあり得ない存在を、あたかも自己像を客体化させる他者存在として自伝の中に配置するのは、小説の中に読者を挿入する〈からくり〉にも似た、虚構の方法である。

事実、高群逸枝の『火の国の女の自伝』は、橋本憲三との合体を実現し得た証拠として、逸枝

の死後、憲三が書き継いだ合作の形で完成された。自己幻想の産物である自伝を対幻想として実現させたことで、高群逸枝像と、逸枝—憲三の対関係は、いちだんと伝説化されたと言ってよい。合体の実現は、理念的には他者であり得ず、現実には「物すごいエゴイスト＝K」である憲三を、逸枝の愛の観念、その無葛藤のナルシズムの同伴者、あるいは加担者とすることで、彼女の母性領域への回帰、すなわち聖少女的で聖母的な女性像を表現したということでもあった。

そのために、『火の国の女の日記』は、すでに自伝という枠組みを超えてしまっている。それは、自伝への衝動がつねに理想の自己像への希求であり、自己幻想の産物でありながら、自伝という方法は、その表現のためには適した方法ではないという、ジャンル自体が内包する矛盾を表わしているのである。そこが〈自伝〉のむずかしさであり、面白さでもあるのだろう。

性愛は少女から女性への通過儀礼だが、性愛を媒介とした男と女の関係で、自我の葛藤は避けられない。女性が男たちの〈女房〉にも〈奴隷〉にもならないためには、男性の自我と対等に向い合い、葛藤しなければならないが、20世紀後半、そのような〈性戦〉を避けようとして、男性との性愛を放棄する志向が強まった。男性との性愛という回路を経ずに、女性性＝女性の本質を救済しようとした模索は、同性愛をはじめとしてさまざまな試行を重ねているが、そうした模索の思想的中心に、女性原理としての母性および母性領域の主張がある。

母性は宇宙的自然と交配して受胎し、生命を産み、育む、肯定的価値の源泉とみなされ、女性はその象徴的母性と自己同一化することによって、性的アイデンティティを確かめ得る、というのが母性思想である。それは大いなる幻想であるかもしれないが、父権制のトラウマを内面に深く刻み込まれたサイキを持つ20世紀の女性たちにとって、それが性的存在としての自己認識を求めての思想的探求の不可避のテーマであったことは間違いない。

本稿では、個人の生と内面の軌跡を描いてそれぞれに自己像を確立しようとする、女性の自伝というジャンルを通して、そのような思想探求の一端を分析した。

【註】

- (1) Maya Angelou, *I Know Why the Caged Bird sings*, New York, Random House, 1969.  
『歌え、翔べない鳥たちよ』矢島翠訳, 人文書院 1979.
- (2) Angelou, *Gather Together in My Name*, New York, Random House, 1973.  
『街よ、わが名を高らかに』矢島翠訳, 人文書院 1980.  
Angelou, *Singin' and Swingin' and Gettin' Merry Like Christmas*, New York, Random House, 1976.
- (3) Maxine Hong Kingston, *The Woman Warrior—Memoers of a girlhood among ghosts*, New York, Vintage, 1977.  
『チャイナタウンの女武者』藤本和子訳, 晶文社 1978.
- (4) ボーヴォワール『第二の性』生島遼一訳, 新潮文庫 1959.
- (5) 高群逸枝『火の国の女の日記』講談社文庫(上・下) 1974.
- (6) 同 『母系制の研究』同 1979.
- (7) 同 『招婿婚の研究』講談社 1953.
- (8) 同 『女性の歴史』講談社文庫(上・下) 1972.